小学校高学年における「得意なこと」と学力

○ 相良順子（聖徳大学）

小学生の高学年では、学校や趣味などにおいて「得意なこと」が明確になり始めます。友人と比較して自分が何が優れているのかを認識し、それに対して自信をもつようになる。「得意なこと」の研究は、特に子育てや教育においてその教科に対する興味・関心と成績との関係を検討したものが多い。しかし、子どもが認知する「得意なこと」と学力、およびコンピテンシーという心理的概念との関連を検討した研究は見当たらない。本稿は、「得意なこと」と学力、コンピテンシーとの関連を検討した。

方法
調査対象：私立小学校5年生74名（男子34名、女子40名）、6年生86名（男子40名、女子46名）。
調査実施日：2013年3月
質問項目：①「得意なこと」文章の読み書き、計算を含め、学力や折り紙、ピアノなど日常生活の中で子どもが得意と感じる17項目。読み書き、計算以外の項目は、各学校の教員に確認して選定した。3件法で回答を求めた。②児童用コンピテ
ンス尺度（桜井、1992）：4つの下位尺度のうち、学習コンピテンス（以下、学習）、社会コンピテンス（以下、社会）を分析に使用した。各10項目、4件法。学力の指標：協力校が毎年2月に实施してきた考查式標準学力検査NRTの結果（全国基準による偏差検）を使用した。
手続き：クラスごとに担当が質問紙を配布、回収した。

結果と考察
1. 「得意なこと」の分類
17項目のうち、読み書きと計算の2項目を除く15項目に対し、因子分析（主因子・プロマックス回転）を行い、3因子構造になっていることを確認した。それぞれの因子を構成する項目から、第1因子を生活系、第2因子を運動系、第3因子を社会系と命名した。
2. 「得意なこと」の男女差
各因子を構成する項目の合計を下位尺度得点として、男女差についてt検定を行った。その結果、生活系は女子の方が（t=8.75）、運動系は男子の方が（t=4.57）有意に得点が高かった。運動系は男女差はみられなかった（表2参照）。

宮本友弘（聖徳大学）

表1 「得意なこと」の因子分析結果

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>1</th>
<th>2</th>
<th>3</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>アクセサリーの作成</td>
<td>0.832</td>
<td>-0.141</td>
<td>0.118</td>
</tr>
<tr>
<td>折り紙</td>
<td>0.663</td>
<td>0.018</td>
<td>-0.019</td>
</tr>
<tr>
<td>料理</td>
<td>0.659</td>
<td>0.020</td>
<td>0.071</td>
</tr>
<tr>
<td>おしゃれ</td>
<td>0.629</td>
<td>0.095</td>
<td>-0.153</td>
</tr>
<tr>
<td>習字</td>
<td>0.409</td>
<td>0.274</td>
<td>-0.051</td>
</tr>
<tr>
<td>歌や楽器</td>
<td>0.382</td>
<td>0.081</td>
<td>-0.102</td>
</tr>
<tr>
<td>まんがや絵(*)</td>
<td>0.319</td>
<td>-0.054</td>
<td>0.161</td>
</tr>
<tr>
<td>かけっこ</td>
<td>0.102</td>
<td>0.801</td>
<td>-0.057</td>
</tr>
<tr>
<td>ドッジボール</td>
<td>-0.021</td>
<td>0.618</td>
<td>0.105</td>
</tr>
<tr>
<td>鉄棒</td>
<td>0.140</td>
<td>0.549</td>
<td>-0.043</td>
</tr>
<tr>
<td>虫取りや収集(*)</td>
<td>-0.043</td>
<td>0.332</td>
<td>0.323</td>
</tr>
<tr>
<td>工作</td>
<td>0.104</td>
<td>-0.042</td>
<td>0.695</td>
</tr>
<tr>
<td>しようぎ</td>
<td>-0.273</td>
<td>0.130</td>
<td>0.514</td>
</tr>
<tr>
<td>パソコン</td>
<td>0.241</td>
<td>0.019</td>
<td>0.400</td>
</tr>
<tr>
<td>テレビゲーム(*)</td>
<td>-0.012</td>
<td>-0.043</td>
<td>0.325</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表2 「得意なこと」領域の平均値とSD

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>生活系</th>
<th>運動系</th>
<th>社会系</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>男子</td>
<td>9.72(2.66)</td>
<td>6.34(1.56)</td>
<td>7.0(1.60)</td>
</tr>
<tr>
<td>女子</td>
<td>13.47(2.70)</td>
<td>6.17(1.89)</td>
<td>5.9(1.46)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

3. 「得意なこと」の領域と学力とコンピテンシーとの関連
男女別に「得意なこと」と国語と算数の学力偏差値との相関を算出したところ、学力においては、運動系（r=-.265）と学力（r=-.330）と算数との相関が女性では生生活系と国語（r=-.302）、算数とr=-.243という負の相関がみられた。さらに、男子は運動系と学習コンピテンシー（r=.311）、社会コンピテンシー（r=.463）と、女子は生活系と社会コンピテンシーとの有意な相関（r=-.265）がみられた。女子にとって生活系が「得意」であることは、成績が振るわないことを補い、友人関係での自信を表す社会的コンピテンシーを高めることにつながっていることが示唆される。